

---

# 旅する製本家

ある太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旅する製本家

### 【Nコード】

N2180V

### 【作者名】

ある太

### 【あらすじ】

徒弟から職人への一步を踏み出した少年が製本家とともに旅に出る。旅の途中、モンスターと戦ったりする冒険（戦闘シーンがあるかもしれないので「残酷な描写あり」のタグをつけさせていただいてます）と、職人のものづくりの物語。

## 旅立ちの日

ニルスが親方に呼ばれたのは十五歳の誕生日を迎える一週間ほど前のことだった。工房の奥の親方の部屋に入ると親方の他にもう一人小柄な男がいた。

「これがニルスだ。読み書き算盤、あと剣術も一通り習わせてある」  
親方は、男にニルスを紹介した。

読み書き算盤は、工房の仕事の合間に先輩の職人から教わった。アルカザイア公用語が中心だが、製本に必要な文字数字なども含まれる。製本工房には、仕事で必要な読み書きを習うための教則本があり、先輩たちも同じ本で習ったのである。

剣術は、これはメダスの町の道場に通わせてもらった。町の道場は騎士の剣術などとは違い、行商人になるための護身術を教える場であつた。将来、町の防壁の外へ出るだろう者で護衛をやとうことのないものは道場で護身術を習う。

「ブックバインダー製本家サティだ。私の工房はアフテラにある。私と一緒に来るか？」

サティと名乗った男は、そう言つてニルスにも丁寧にあいさつした。ニルスは、大人からそんな風に挨拶されたことに緊張して顔を赤くした。もちろん尋ねられたからといってニルスに選択の余地があるわけではない。

徒弟は大体十五歳で職人になる。職人になったらすぐ工房を持てるわけではない。多くの場合は、また別の親方の下で働くのだ。そうしていくつかの工房を渡り歩いて、いろいろな仕事やその仕方を見

て独り立ちするが、そのうち工房を構え親方になる者はホンの少しだけだ。一生を親方の下の職人で終わる者も少なくない。ニルスはその第一歩としてアフテラのサティの工房に行くことになったということなのだ。

「魔法は使えるか？」

「はい。火の魔法が少し使えます」

製本の見習いに火の魔法は危ういと思われるかもしれないとニルスは、また別の意味で緊張した。しかしそれは考え過ぎだったようだ。「火が。膠を溶くために使えるな。出発は三日後だ」  
にかわ

サティがそう言うのと、親方の合図でニルスは親方の部屋を後にした。親方とサティは、その後もずっと話をしていたようだったが、三日となるとニルスにも片付けなければならぬことがある。

まず、工房に戻って職人のライアスに話しかける。

「アフテラのサティさんの下に行くことが決まりました。出発は三日後だそうです」

ライアスはちよつと顔を上げて遠くを見るようにしてから聞いた。

「そうか、今の本はどこまで進んでいる？」

「マティスさんの転写本をちよつとさつき二冊目の折りが終わってプレスにかけたところです」

「三日だという準備もあるだろう。今日中に三冊目の折りまでやりなさい。それが終わったら、片付けや準備にかかっていいぞ」

製本の工程には、プレスだとか糊が乾く間とか、すぐに次の工程にかかることのできない部分がある。そのため、この工房では三冊を一組として仕事をするのが普通であった。折りの作業だと三冊目をプレス機にかけたところには一冊目の綴じを始められるのである。

ニルスは言われるままに自分の作業台に戻り三冊目の折を始めた。今、作っている本は三枚の紙を一つの折り丁にする。一冊分の紙の束を上から三枚ずつとって、ページ数を確認しながらへらを使って

きつちり折っていく。簡単な作業だが、ここで乱れると最後の仕上がりに響くのである。大きな工房で取り扱う印刷の本には折丁ごとに符丁がついていて間違えないようになってしていると聞いている。しかし、精霊インクを使った転写本にはそんな符丁はついていない。また、もともとのインクの量によって転写がうまくいかないこともある。そんなページを発見するためにも素早く目を走らせながら折っていくことが必要である。手と目を忙しく動かしながら、ニルスは旅立ちの餞はなむけは何だろうかと考えていた。

この工房では、それぞれの誕生日に他の者が協力してプレゼンを贈る習わしがあった。ニルスが工房に来て初めての誕生日を迎えたときには、へらをもらった。教えてもらいながら自分で削って油に漬けて大事に使ってきた骨製のものである。九歳では小さなナイフをもらった。ナイフは製本作業にいろいろと必要だが、それぞれに癖があつて人のを借りると後々使いづらくなる。それで早めに自分のナイフを持たされた。何度か指に切り傷を作り痛い思いをしながら使い方になれてきたのだ。針をもらったのは十歳で綴じを教わったときだ。製本用の針は縫い物の針より太くて長い。そして、針先がとがりすぎていては紙を傷つけるのでヤスリで先端を少しだけ丸くする。あまり丸くしすぎると、それはそれで使いにくい。その加減も使いながら覚えてきた。十一歳でもらったコツというのは四角い硬めの木の欠片である。職人の好みによっていろいろな大きさがあるが、ニルスのそれは片手にのるくらいのものである。これで紙の束をまつすぐに整える使いこなせば便利な道具である。十二歳で糊を使うときの刷毛をもらった。馬の毛を使ったもので黒い木でできている。大きさや用途に応じて工房で共同で使う刷毛はたくさんあるが、自分の刷毛はやはり使い勝手がいい。糊や膠を使った後はよくよく洗って乾かして大切に使うてきた。十三歳でもらったのは目打ち。持ち手が丸くなっていてすっぽりニルスの手に収まる。これで穴をあけて綴じるのだ。十四歳では真鍮でできた短い定規を

もらった。

そして十五歳。職人となる年には、別の工房に移るにしても、この工房に残ることになってもちよつと豪華なプレゼントがもらえることになっていた。それを餞はなむけと呼んで徒弟の間では楽しみにしていた。一昨年、隣町の工房に行ったヘルガは綴じ台をもらった。ヘルガは綴じが特に上手だった。新しい工房に行ってもきつとその腕を見込まれていろんな綴じを覚えていることだろう。

ニルスは直接はあったこともないが、十年ほど前に王都の工房へ修行に行った徒弟はなんと金箔押しきんぱくおしの型をもらったらしい。王都の工房ともなると金箔装飾の本も多いだろうという配慮である。もちろん装飾によって何種類もの型を使うので多くは工房ごとに備え付けの型を使う。が自分の型があればちよつとしたものにも箔押しをすることができ。さて、自分は何をもらうのだろうとニルスは今からわくわくしていた。

新しい親方はどんな人だろうとか、アフテラってどんな町だろうとか、そもそもアフテラってどこにあるんだろうなどとふつと気を緩めるとそんな不安が次々とわき上がってくるが、それこそ考えても仕方ないことである。新しい親方がどんな人であろうと、ニルスはその新しい親方の工房で働くしかないのだし、アフテラがどこにあるってどんな町であろうと新しい親方の工房はそこにあるのだから。

三冊目の折りを終わって紙の帯できつちりまとめて二枚の板にはさんでプレス機にはさむ。大きなハンドルをぐるぐる回して鉄板を下ろし、天板が板につくまで板がずれないように指を添えている。ずつと何年もやってきた手順をニルスは間違いなくこなした。

「今日はもうあがっていいぞ。ここの片付けや旅の準備もあるだろう」

ライナスに仕事が終わったことを告げに行くと、そう言ってもらえたのでニルスは自分の作業台のまわりを片付け始める。隣で小さい徒弟のテオが何か言いたそうにしているが、今はまだ休み時間じゃない。徒弟がおしゃべりをしていい時間ではなかった。ニルスもそれはわかっているので、後でという風に頷いてみせて、作業台の引き出しからぼろ布をとりだした。その布で、今まで使っていた工房の道具をちゃんと拭いてしまっていく。次にこの道具を使うのはどんな人だろうか。

自分の道具は、同じ布でふいてあまり布で自分で作った道具入れにしまう。その後、作業台の上のゴミを集めてゴミ箱に捨て、ぼろ布を洗い場で洗う。洗った布で作業台の上をきれいに拭いてできあがり。下に落ちたゴミは箒で掃き集めてゴミ箱に捨てる。そうして、すっかりきれいになった七年間使ってきた作業台をもう一度しっかりとみると工房の中の皆に頭を下げた。

「あがらせてもらいます。ありがとうございました」

「おう、元気だな」

「がんばれよ」

「焦らずに、こつこつやるんだぞ」

それに答えて、職人たちが声をかけてくれる。それを背にニルスは工房を後にした。

「サテイさんと一緒に行くんだってね。サテイさんはいい人だよ。しっかりした技術もあるし、頼りになる人だ。旅の製本家<sup>ブックバインダー</sup>としてはピカイチさ」

工房の外にでると、おかみさんがニルスを見つけて呼び止めた。その言葉で、おかみさんということとは、親方も新しい親方のことをよく知っているらしいことがわかってなんだかほつとした。

「<sup>ブックバインダー</sup>製本家は馬車で行くから、ある程度の荷物はもっていけるよ。」

着替えとか道具とかこれにいれるといい」

荒い布で作られた物を詰めると子どもの背丈ほどにもなるだろう大きな背嚢をニルスに手渡す。ニルスは礼を言って自分の部屋に帰った。今夜とあと一日で慣れ親しんだこの部屋を片付けなければならぬ。

翌日、ニルスは持っていく荷物をまとめたり、いらぬものをテオにやったり捨てたり部屋を掃除したりと忙しくしていた。職人たちも休み時間に立ち寄って、旅の注意なのか自分のときの自慢なのかはたまた失敗談なのかわからない話をしていく。途中で話に夢中になって手が止まってしまつて片付けが遅れてしまうこともあつたが、それらの職人たちの話をきいているうちにニルスは今、自分に起こっていることが特別なことではなく誰もが通る道なのだとなんとなく心におちるものがあつた。

「ぼくは、ずっとこのままだと思つてた」

だから、テオにそう寂しげに言われたときも笑つて答えることができた。

「そんなことはないよ。俺の前にはヘルガ姉さんが隣の工房に行つたし、テオの後にだつて誰かが徒弟にくるんだよ。ちゃんとめんどつみてやれよ」

声もなく頷くテオの肩に手を置くと言葉を続ける。

「それよか、わかつてるか？明日から徒弟の仕事、おまえ一人で全部やるんだぜ」

「あ」

テオは今それに言われて初めて気がついたようであつた。

「膠や糊の準備も、筆を洗つたり、水を替えたり、ゴミを捨てたりさ」

「う、うん」

「工房の前の掃除もわすれるなよ」

「…うん」

今まで二人でやってきた徒弟の仕事を一人でやることを考えてテオは別な意味で不安になってきたようである。

「ところで、何かあったか？」

「ああ、忘れたお祝いの用意ができたから、ニルス兄さんと呼んできなさいっておかみさんが」

「こいつ、それを先に言えよ！」

ニルスの旅立ちのお祝いには、おかみさんが腕によりをかけた料理が並び、職人たちには酒も振る舞われた。親方の隣にはサティの姿もあった。

「ニルスへの餞<sup>はなむけ</sup>はこれだ。これからも腕を磨いていい製本家になるんだぞ」

親方から渡されたのは黒い革の箱。中には革刀が入っていた。刃の部分は赤い革のカバーがつけられている。黒い同じ革で作られた研ぎ台もセットになっていた。

「革漉き覚えないとな」

サティが静かな声で言った。

「お、俺…」

ニルスはうれしくて言葉がでてこなかった。これがあれば、革の加工ができる。革の装丁ができるのである。紙や布で装丁するのも美しいが、なんといっても革の装丁は製本の花形である。革の上に箔押しやオンレイ、インレイいろいろな装飾を施して世界で一冊しかない本をつくりあげるのだ。

翌朝、早朝。ニルスは工房の人たちに見送られながら、工房の前で馬車を待っていた。

サティの馬車は黒い馬にひかれた一頭立ての馬車であった。ふるさとの田舎で見た幌馬車ではなく、立派な屋根のある焦げ茶色の馬車であった。飾りこそはないが凝った作りであることは馬車に初めて乗るニルスですら扉のノブなどに見て取れた。また、それが丁寧に

使い込まれている。

「こりゃ、すごい馬車だ」

ライナスがびっくりしたような声を上げた。道具を大事にする職人  
はいい職人だというのが常日頃からの彼の信条である。馬車も旅す  
る製本家の道具の一部とするとサティはかなりいい職人になるのだ  
ろう。  
ブックバインダー

ニルスの荷物を積み込み、親方からサティへいくつかの包みが渡さ  
れる。素材や他の工房へ届けてもらう荷物である。すべての荷物  
の積み込みが終わると、ニルスは工房の皆にもう一度頭を下げた。

「今までありがとうございました。いってきます」

「がんばれよ！」

「いつてらっしゃい」

「元気でやるんだよ」

皆の声を背に受けながら馬車に乗り込む。サティは既に御者席に座  
っている。馬がぶるんと体をふるわせて馬車は動き出した。町中で  
は、ゆったりと進む。そうして町の防壁を抜ける。大きな石造りの  
門をくぐるとそこは町の外であった。

さあ、旅が始まる。世界はきつと広い。

## 旅立ちの日（後書き）

製本家を主人公とした冒険もの…のはずがまだ「最初の町」から出るところまでです。更新も話の展開同様、まったり気味となる予定です。どうぞよろしくお願いします。

## 町の外（前書き）

物語中の単位がメートル法です。ただでさえわかりにくい説明をこれ以上混乱させないためです。ファンタジー世界にあるまじきと感じられた方がいらしたら申し訳ありません。

## 町の外

「改めてよろしく」

御者台に並んで座る新しい親方サテイが言った。荷物はすっかり後ろの馬車の中にいれてある。

ブックバインダー

旅する製本家の馬車は、箱形の結構しつかりした作りになっていて、御者台の後部に入り口があった。左右の側面に鎧戸のついたガラス窓がある。それには、本物のガラスがはまっていた。馬車の後部は窓も入り口もなく、内部から見ると一面の戸棚になっていた。

「よろしくお願いします」

「最初に言っておくけど、ぼくは猫人間ねこなんだ」

え、とニルスがサテイを見返すと、ぴよこんと頭の上に柔らかい色の耳が飛び出した。そのときはじめてニルスはサテイが薄茶色の髪の毛であることに気がついた。瞳の色は榛色はしはみいろである。視界の端ではたばたしているのは、しっぽだろうか。獣人というのは、メダスの町の中では会うことがなかった。幼い頃を過ごした村の水車小屋のおじさんが確か獣人だと聞いたことがある。大柄なその人は力も強そうでいつもしかめっ面をしていて子どもたちにはとても恐れられていた。大人たちには一目置かれていて何か村で決定に困ることがあった場合、その人の一言が決定に大きく影響しているようだった。よく父が「水車小屋がああいうんだったら仕方ないな」と言っていたのを覚えている。

目の前のサテイは、怖いというのではもちろんなかった。柔らかい色合いが優しい感じだが、それでいて毅然とした雰囲気があった。貴族という人たちに会ったことのないニルスは、貴族のお血筋だよと聞かされてもうなづいてしまいそうである。ただ、猫なので小柄なのかと納得した。

「町中では人型になるけど窮屈なんだ。それで野宿が多くなつてしまうと思う。もちろん、危険な場所では野宿はしないからね。まあ、この馬車は特別製だから、野宿と言つても不便はないよ」

旅の製本家の得意先の一つに魔法使いの塔がある。魔法使いの書いた魔法の本を修理したり、預かつて転写したり、また別の魔法使いに譲つたりする。そのため、自分たちの大事な魔法の本を守るためにそれぞれの魔法使いが馬車に魔法をかけてくれているのである。

「大体、朝ご飯が終わつたら移動して、お昼ぐらいには次の宿泊場所につく。そこで仕事して次の朝にまた移動。必要な場所ではもう少し長く泊まることもある。ここまではいいかな。あと何か聞いたことがあつたら、遠慮せずに聞いてほしい。答えられない事は、ちゃんと話せないというから」

そう、促されてニルスはおずおずと言葉にする。

「お昼ぐらいで移動をやめるといふのはなぜですか？」

「もっと、どんどん行けば早く進めるということかな？この旅はちゃんとルートがあるんだ」

製本家に用事があるのは本を読める人たちである。その数はそんなに多くない。貴族、魔法使い、町や村でも裕福で字を勉強する余裕があつた人、あとあまり一般に知られていないが村のまじない魔女たちもほとんどが字が読めた。その他の人たちはほとんどが読めないし、もちろん書けない。多くの人は自分の名前だけ書いて読める程度である。普通に誰でもが読めるわけではないので、闇雲に旅をしてその辺の村で店をひろげてても商売にならない。しかも、生活必需品ではないし高価でもあるのでそうそう買つたり修理に出したりはしない。それでサティの場合は、三つのルートを順番にその年ごとにまわることになっている。一つのルートの中で、立ち寄る町や館や塔はポイントポイントで決まつていて、三年後の大体同じ時期に訪問することになっていた。ポイントからポイントの間どのルートで行くかまでは決めていなかった。そのときの状況に応じて判断し

ていた。

春にアフテラを出て夏に北の涼しい国を巡って秋にアフテラに戻る。雪の積もる冬はアフテラで工房でないとできない仕事をする、サティは一年の巡りをそう説明した。

「アフテラの夏は暑くて湿気が多くて夜なんて寝てられないんだよ」

「今日はここにしようか」

サティは街道沿いの少し開けた場所に馬車を乗り入れた。奥に泉があつてその周りに石が組まれている。

「ニルスは火の魔法使えるんだったね。火をおこすの任せてもいいかい？」

二人は広場の周りの森の中で一束の落ち枝を拾った。サティがそれを組み合わせ、そこにニルスが火を付けて小さな焚き火を作る。魔法使いになるほどではなかったが、ニルスは小さな火を作りだすことができた。

「アンヌがえらくたくさん入れてくれたな」

サティが食べ物の入ったバスケットを覗き込みながら苦笑する。アンヌとはおかみさんの名前だった。ハムと野菜のはさまったサンドイッチ、肉とサラダ、スープ、パイなどがぎっしりはいっていた。

昼ごはんはサンドイッチとお茶で簡単にすませた。

「馬車の中を案内しよう」

ニルスがサティに続いて馭者台の後ろの入り口をくぐると一段のステップを踏んで中に入る。ステップの下は一面の小さな引き出しになっていて道具類が仕舞われている。その奥はクッションの置かれた座席になっている。座席はほぼ馬車の幅があつて二人が並んで座つても十分にゆとりがあつた。馬車の後部、座席の背もたれの部分

は戸棚になっていた。

その戸棚の中には売り物の本、革や各種の紙などの素材、少し大きめの道具などが納められていた。売り物の本には、すでに買い手がついているのか名前の書かれた紙がはさまっているものもある。本の種類も写本、転写本、印刷の本などさまざまであった。サティは、その中から革で包まれた本を取り出してニルスに見せた。

「ロングステッチバインディングはしたことあるかな？」

「はじめて見ます」

受け取った本の中身は白紙だった。

「ノートもうちの有力商品だよ。町の製本工房へ行けばもつとちゃんとしたノートが手に入るけど、持ち歩くために小さな簡単なノートが欲しいと言う人は結構いるんだ。今日はこれの説明をするから作ってみて」

まずは革選び。最初のノートは試作品だし自分で使っていていいと言われてニルスは真剣に革を選んだ。紫色の山羊革にする。本文にする紙はちょうどいい大きさに切ってあった（サティは天地135mm、横150mmに切っていた）。それを三枚一組にして折っていき全部で八の折丁を作る。

紙の天地、横幅と八つの折丁を重ねた厚さをはかる。それにあわせて革を切る。天地はぴったりでいいが、心持ち革が大きい方がいい。横は紙の横幅、背幅（折丁を重ねた厚さ）、横幅、背幅そしかぶせの部分をたした大きさになる。かぶせの部分はまっすぐでなくても自然の革の端を生かしてもおもしろい。

少し厚めの紙の端切れ（天地は本文紙よりも長め）を用意してそれを二つに折る。最初にそれを本文紙の天にあてて本文紙の長さを測り、折り目の部分に印をつける。上から15mm、さっきの印から

上に15mmに印をつける。その印からそれぞれ内側に40mmに次の印をつける。今、上から15mm、55mm、80mm、120mm、135mmの位置に印があるはず。このうち、135mm以外の四つに目打ちで穴をあける。この厚紙をジグという。

ジグをそれぞれの折丁の内側にあて、穴をあけていく。

本文紙の準備ができたら次は革だ。表紙になる部分は本文紙より1mm程度横幅が大きい方がきれいに仕上がる。その次の背になる部分に穴をあける。先ほどのジグを活用して穴をあけるが、革の天地は本文紙よりも心持ち大きくしてある。それを考慮してチリを考える。天地方向には四つ、横には三つ合計十二の穴をあける。背幅の間に三つ穴が並ぶので穴がつながってしまわないように注意する。なお、背幅は革の厚みなども考えて余裕をもつてとること。

天地の十倍の長さの麻糸に蠟をひく。余分な蠟は布で拭き取っておく。糸の端から50mmほどのところの糸のよりを戻し、その間に針を通して引き締め抜けないようにする。もう片方の端は玉結びにする。

革の小口側を水平に置く。本文紙も同じ方向にして背が向こう側になるように重ねておく。

ここから先、右から一の穴、二の穴、三の穴、四の穴とする。紙は一丁目、二丁目とし、革は一段目、二段目、三段目とする。

一丁目の紙の二の穴を外側から入り一の穴から出る。革の一段目の一の穴を内から外に抜け、一段目二の穴に入る。一丁目の二の穴の外から入り三の穴から出る。同じ穴を使うときには前の糸を塗ってしまわないようにくれぐれも注意する。一段目三の穴から出て、一

段目四の穴から入る。一丁目四の穴の外から入り三の穴から出る。糸を引き締めるときは進行方向に向かってひくこと。違う方向だと紙を傷めることになる。

一丁目の三の穴から出たところで革に通さず、二丁目を重ねておく。二丁目の三の穴から入り四の穴から出る。革の一段目の四の穴から出て三の穴に入る。二丁目の三の穴から入り二の穴から出る。一段目の二の穴から出て一の穴から入る。二丁目一の穴から入り二の穴から出る。

また、革を通さず、三丁目を重ねておく。三丁目の二の穴から入り一の穴から出る。あとは一段目と同様にする。

四丁目は二丁目と同様の針運びであるが、ここから革は二段目になる。一、二、三丁が一段目。四、五丁が二段目。六、七、八丁目が三段目である。そもそもバランスを考えて折丁数を九にしてもいいし、革にあける穴を四とか二とかにしてもよい。

最後は、八丁目二の穴から出てきたところで玉結び。仕上げに糸をクロスにかけてもいいし、革の外に出ているときにビーズなどを通すなど自由自在にアレンジができるようだ。ニルスはかぶせの端に糸を三本通すとちょうど糸の長さと同じになるようにして六本の糸を束ねた。そこから二本ずつで三つ編みにしていく。糸の端には銀の小さな護符を作つてとめる。閉じたノートをこの三つ編みの糸をまわしてとめておくのである。

このノートは、全部使い終わったら糸を切つて中身を製本することができ、新しい紙でノートを作つて使い慣れた革はそのまま使える。

「やあ、できたね」

馬車の中の片付けをしていたサティが出てきた頃には、ニルスの一

冊目は完成していた。ニルスは、うれしそうに革を押さえたり紐を解いてあけてみたりしている。

「ロングステッチバイディングの作り方はわかったかな」

「はい。折丁が終わるとき、革の外に針を出さずに次の折丁を綴じるとというのがポイントですね」

「うん。それにこの綴じ方には正解はないから、自分の好きなようにいろいろと試してみるといい。結局のところ、本文紙が表紙に綴じつけられて落ちてこなければいいんだ」

「ところで、馬車の中を片付けたので来てくれるかな」

そういうサティについてニルスが馬車の中に入ると、入り口入ってすぐの足下の戸棚の進行方向に向かって右側の部分があいていた。空っぽになった引き出しが並んでいる。

「ここにニルスの道具を入れなさい。雨の日などで馬車の中で作業をするとき右がニルス、ぼくが左に並んで座ってすることになる」

「ありがとうございます」

ニルスは馬車の中とはいえ自分の戸棚をもらうと一人前の職人になったような気分がした。

## 町の外（後書き）

ロングステッチバインディングを文章だけで説明するというのは、いささか無謀でした。実際に作ってみながら書いたのですが自分の文章力の無さもひしひしと感じます。

構造がわかれば簡単ですし、最近手芸店などでも革の端切れを扱っているようです。ニルスのように自分のノートを作ってみませんか？

なお、サティの一人称は町中では「私」ですが、町を出て旅の途中は「ぼく」になります。

ロングステッチ・バインディングの作り方、少し修正しました。

## 雨の日

その日は、朝、停泊地を出る頃から小雨が降り始めた。

「雨だとゲンヤも疲れるからね。今日はもうちよつと行ったらまゐる場所を探そう」

サティはそう言うつと昼前には馬車を街道からはずれ森の中にいれ木の下にとめた。

「ここにしよう」

そう言つてゲンヤをはずすと、ゲンヤはそのまま森の中に姿を消した。サティはそれを見送つておいて馭者台の下から布のようなものをひきだす。続いて馭者台の上に幌のようなものを出した。

「ニルス、そつち引つ張つて」

「これ何ですか」

下に敷いた布と幌はほぼ同じでゲンヤが入つても余裕の広さである。幌の先からカーテンが下がっている。カーテンの裾を下の布が触れた途端かすかな光が縁に沿つて走つた。魔法だった。

「ゲンヤの部屋だよ」

薄い布のはずが雨が入つてこない。それどころか泥の上に敷かれて雨に濡れていたはずの下布もすっかり乾いた土になっていた。準備ができたころに戻つてきたゲンヤを部屋の中に入れると布のカーテンのはずがもつとしつかりした素材のように見えた。

馬車にはできあがつた本だけではなく、綴じる前の紙の束も積まれていた。旅の途中、必要に応じて製本するのだらう。

ニルスは13折からなる転写本の綴じ前のものを3セット渡された。

3枚で1丁が13折、すなわち39枚の紙の束である。1枚で4ページになるので、全部で156ページの本である。本文の大きさは、二つに折った状態で天地が19センチ、左右が12センチだった。

まずは3枚を1丁にへらを使って丁寧に折っていく。折上がったものは、重しの下に置いておく。1冊分折り終わったところで2枚の板にはさんでプレス機代わりの万力で締める。

3セット分終わったところで、綴じにかかる。

二つ折りにした細長い紙に印が付けられていてそこに穴があいている。これをジグという。それを折り丁の内側にあてて穴を開けていく。同じ位置に穴があくことになる。ジグは本ごとに作るが同じサイズのものならば前に作ったものをつかってもいい。サティは作ったジグを籠箱に入れていた。そこから、ちょうど同じものを選んで使った。

穴の位置や数は本の大きさにもよるが、基本は本の天地からそれぞれ1センチ、その間を5等分する。あわせて7つの穴をあける。端の2つには支持帯を使用しないため、支持帯は4本である。もちろん、小さい本なら支持帯の数は3本、2本と少なくすることも可能である。大きい本の場合は逆に5本、6本、7本と増やすこともできる。

ジグを使ってすべての折り丁に穴があいたら綴じ始める。工房ではかがり台を使っていたのだがとニルスが思っていたら、馬車にはかがり台ものせてあった。下の板の端に垂直に窓枠のようなものが固定されている。枠の上と板の下の間で支持帯を固定してそこへ折り丁をかがりつけていく。なくても支持帯を調整しながらやればできないことはないが、特に1丁目ではあった方がとても楽になる。

まず、両手をひろげたくらいの幅の糸をきり蜜蝋をひく。2回ほど蜜蝋の塊に擦り付けたら布で拭き取るようにして刷り込む。これは、糸のほつれを防ぐと共に締めりをよくするためである。

蠟をひいた糸を製本用の針に通す。製本用の針は布でなく紙を縫うためか太い。針穴も大きいので糸を通しやすいが、糸も太いことがある。糸の太さは本の大きさに関係してくる。大きい本は中身も重たいので太い丈夫な糸を使う。

また、ロングステッチバイディングのように背がためをしない製本方法のときは糸が太くてもいいが一般の背がためをして表紙をつける本の場合は綴じ糸が太いと背の部分が膨れてしまう。

糸の片方の端から5センチ程度のところで撚りをもどす。糸は何本かの細いものを撚りあわせて作られているため撚りを戻すとすきまができる。そこに針をくぐらせて糸をひくと針穴から抜けなくなるのだ。

糸の端をかがり台にからめて天から一つ目の穴から入り二つ目の穴から出る。針が折り丁の中にあるときでなく、外に出てから糸をひきしめる。もちろん、最初はからめているだけなので、ここであまり引つ張っても抜けてしまう。糸をひくのはかならず進行方向に向かつてである。ちがう方向にひくと紙が破れ

て穴が大きくなる。紙を傷めることにもなるし、後々糸の緩みの原因になる。

出てきた糸を1本目の支持帯の外側から回して出てきた穴から中にいれる。このとき、出てきたときの糸をぬってしまわないように気を付ける。ここで縫ってしまうと糸を引き締めてもうごかなくなってしまう。針は中だとどまることなく次の穴から出す。

2 本目の支持帯をかがって同じ穴にもどる。その繰り返しである。途中4本の支持帯をかがって6つ目の穴から糸を出したら、2丁目を上にのせてちょうど出てきた穴の上に入る。折り丁の向きや順番には注意のする。

2丁目の折り丁が終わると、ちょうど最初の穴の上にきているはずである。そこで、からめてあった糸先と結ぶ。2回固結びで結んで糸先はまたかがり台にからめておく。

3丁目以降の終わりは、1段下の糸にからめて糸をひくまえに輪に針をくぐらせて結び目を作ることによってとめる。

糸がたりなくなったら折り丁の外側で継ぐ。機結びなどでほどこにくいようにする。

ときおり支持帯をひっぱって背の部分をコツなどで安定密着させると仕上がりがきれいになる。

すべての折り丁がかがり終わったら、折り丁の端の1段下の糸にからめるところを2回、2段下までやって終わる。

支持帯と糸先をかがり台からはずす。支持帯のちょうど真ん中に本文がくることがのぞましい。背をみながら調節する。支持帯に革などを使用している場合にはかがった後動かすことが困難である。最初にかがり台に固定する位置が大事である。

糸先は1センチほどに切っておく。最初の糸先、途中で糸継ぎをした部分も同様に切る。綴じの方は慎重に糸をひきながらやっていると時間がかかった。1冊目が終わったところでサティが声をかけた。

「そろそろ暗くなっても来たし晩ご飯にしようか」  
雨も降り続いていてランプをつけてもかなり暗い。

「ごはん、何か食べたいものとかあったら、次の町でも買うから言  
ってね」

雨の日の食事は簡単なシチューを携帯コンロで作り食べた。携帯コンロは外は熱くならないのに煮炊きものに十分な熱を得ることができる。馬車の中でも使える優れたものだ。このコンロで膠をといたりもするらしい。

「食べたいもの…といわれても」

これまでは、おかみさんが作ってくれたものを毎食食べていただけなので、これが食べたいとかあれが食べたいとかすぐには思いつかない。サティの方は旅の生活が長いため料理のレパートリーも広いようだが、そのうちこういう下働きの仕事は自分がしないといけないのではないかとニルスは思った。

もともと、言われてすぐ料理ができるわけでない。今はまだこの野菜を切つてとか水を汲んできてとか言われてその通りにするだけである。食べたものの作り方もこの間作ったロングステッチ・バインディングの旅のノートにメモしておくことにする。

## 雨の日（後書き）

やはり順番が不自然だったので花布の部分を「綴じ」に変更しました。

「本綴じ」です。

## 黒革装丁のノート

「そろそろお昼ですね」

お腹のすいてきたニルスは隣のサティに声をかける。

「そうだねえ。このあたりで今日はとめよ…っか」

サティが答えたとき、一瞬馬車が揺れた。道とはいえでこぼこが結構あり、石や木の根で車輪がとられて揺れることは少なくない。

馬車は道から少し外れて森の中のひらけた場所に止まった。前にも旅人が利用したのか、たき火の跡が残されている。

「ごはんだ！」

ニルスは馬車から飛び降りて、うーんとのびをすると、ゲンヤを軛からはずしにかかる。その後、ご飯を作るための薪を拾いに行った。

一束の枯れ枝を集めて戻ってくると、サティがたき火跡を見下ろして難しい顔をしていた。

「どうかしました？」

「変な気するんだ」

たき火の跡の横には忘れ物なのか小さな器が一つぼつんとおかれていた。旅の荷物はどれも大切だ。それを忘れていくとはよほど間が抜けていたのだろうか。ニルスがよくわかっていない顔でそれを見ていると。

「たき火の跡って出発するときに地面にならすよね」

立ち去った後、燃え残りの木から火が燃え上がって山火事になってはたいへんである。たき火の始末は旅人の基本であると言ってもいい。燃え残りの木は土をかけておき、灰などでもできるだけならして下の土の状態にする。そうして、忘れ物のないように荷物を点検し

て出発するのだ。

それなのにここには、後始末もされていないたき火の跡がある。幸い火が再燃することはなかったようだが、マナーの悪い旅人もいたもんだ。

「よほどあわてて出発したようだね」

ニルスが食事の用意をしている間にサティは道の方まであたりを見に行っていた。帰ってきたサティが言うのには先ほど車輪がとられたところに轍の跡が深く残っていた。

「寝坊でもしたんでしょうか」

「それだといいんだけど。何か落ち着かないね」

午後は先日から取りかかっている綴じの続きをした。そうして待望の晩ご飯。

「ブックバインダーズ・ノートはもらったかな？」

晩ご飯のあと、サティが聞いた。

メダスの工房を出る前の日、ニルスは親方より親方より饒として革刀をもらったのだが、もう一つもらったものがある。それは黒い革装丁の手帳というのには若干大きいしかし片手で扱えそうな小振りのノートであった。

「一人前になるためにもこのノートに書いてまとめておくといい」  
親方から渡されたノートは何も書かれていなかった。今まで工房で習い覚えたことはその都度メモやその辺の紙に書いてあった。それをもう一度思い出しながら覚えたことをまとめていくことが大切な

のだ。

「このノートに書くときには精霊インクでな」

親方は意味ありげに付け加えた。

「転写するのですか」

精霊インクで書かれた文字は特殊なシートを使えば精霊の魔法の力で10部くらい転写できる。それが転写本である。写本ほど高価であつたり特別ではなく、印刷でたくさん刷つても需要がなさそうな本についてはこの精霊インクで一旦写本を作つて転写するのが普通であつた。

「いやいや、これはブックバインダーズ・ノートだよ。転写はしない。精霊インクを使うわけは必要になつたときにわかる。もつとも必要になるときが来ない方がいいのだが」

親方ははつきりとは言わなかった。いつもは直接的な物言いの人だけにニルスは不思議に思った。しかし、ときおり親方がこんな風に言つたときには黙つて従つていた方がいいことをこの工房で働く内に知つていた。

「親方からいただきました」

荷物の中から黒い革装丁のノートを出してサティに見せる。もちろん、町を出てから忙しくてまだ何も書いていない。

「精霊インクはここに入れてあるから使つていいよ。ペンはもつていたね」

ブックバインダーズ・ノートは精霊インクを使うことが前提のよう

だ。しかし、精霊インクは特別なインクなので高価なものである。それを自由に使わせてもらえるのはありがたかった。

「普通のインク用のならあります。ペン先は変えた方がいいですか」「そうだね、特別なペン先はいらないけどインクが混ざるとよくないから別のペン先を使った方がいい」

昔は、鳥の羽を削ってペン先にしていたそうだが、今では金属のペン先が作られていてそれをペン軸に差し込んで使う。ニルスは自分のペン軸とペン先、それにインク壺を持っていた。「今日の出来事」などを旅のノートに記すときにはそれを使っていた。

精霊インクを使わせてもらうことになったのでブックバインダー・ノートを書き始めることができる。まずは、今までの紙の束を順番に並べて、何を書き写すのかを決めるところからである。

## 黒革装丁のノート（後書き）

精霊インクは、もちろん想像の産物であります。でもこんなのがあるといいなーと思うシーンが次の次の更新で出てくる予定です。

今回、ニルスがまだ綴じの続きをしているため「製本マニュアル」の部分はありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2180v/>

---

旅する製本家

2011年10月9日03時02分発行